

琉球大学学術リポジトリ

馬鈴薯の栽培

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20992

馬鈴薯の栽培

1. 性状と適応性

ナス科に属し、地下にある茎から出た枝の先端、時にはその側枝が肥大して塊茎ができる。塊茎にはラセン形に目が配列され、その中に芽を生ずる。冷涼な地方では開花、結実が行なわれるが、暖地では一般に開花しても結果しない。

冷涼な気候に適し、生育適温は15~24°Cである。琉球では10月下旬から5月上旬まで栽培適温下にあるわけだが、薯の発育にもっともよい気温は17°C内外で、11~12月上旬に植付けて2~3月に収穫するのが気温的にはよい時期である。薯の発育には日長も関係があり、茎葉の発育する時期は比較的長日で薯の発育する時期には短日状態である場合が最もよい。それ故、世界における主産地は温帯でも北方にあり、アメリカの主産地は北方の州であるメイン、オレゴンなどであり、日本では北海道である。琉球は栽培適地とは云えないが、短期作物であり、水田裏作や甘藷などの輪作に適している。

馬鈴薯には品種固有の休眠期があって、休眠期を長く経過した老薯ほど発芽早く、早生になるが、芽立ちが多く茎細く、草勢や耐病性が弱くて収量が少いので、10~11月上旬植えには長崎産の春薯であるタチバナ、ウンゼンに自給種が用いられ、11月下旬から12月にかけては寒高冷地産のネベック、農林1号、男爵、2~3月植えには長崎秋産薯のウンゼン、タチバナに秋作自給種が用いられる。休眠期間は品種、栽培期により異なる。秋作産のタチバナは大体115日、ウンゼンは120日、春作産はタチバナ73日、ウンゼン75日である。若薯は発達遅く、芽立ち少く、茎太く、収量が多いので収穫期と収穫期の間は品種毎に充分考慮しなければならない。ちなみに、春作薯の農林1号の休眠期は77日、男爵100日、ケネベック107日である。

土壌適応性の範囲は広く、砂上から重粘土まで各種の土壌に栽培されているが、土壌により生育は著しく異なり、砂土は生育早く、春馬鈴薯とくに、早掘りに適するが、病害に弱く、とくに秋馬

鈴薯に適しない。粘質土では生育はおそいが病害に強く、殊に秋馬鈴薯に適し、収量、品質ともに優良である。土壌酸度は、PH5.0~6.0で微酸性に適し、4.6以下、7.0以上で強酸性とアルカリ性土壌では生育はよくない。

2. 種薯

種薯はバイラス病と休眠後の経過期間についてとくに考慮しなければならない。種薯を自給するにはバイラスを媒介するアブムシの発生以前、または発生5日以内に早掘りするか成熟した薯をさぐり掘りすることも行なわれる。バイラスのない種薯を用いると、たとえ生育期間中にバイラスに侵されても被害は比較的少ない。

大きさは37g内外が適当で、縦切がよいが、必ずしもそれにこだわる必要はなく、必ず一つ以上の芽がつくように、なるべく同じ大きさに切る。大きい種薯を用いる時は縦に四分する。このさい、頂芽の真中に包丁を入れると最も優勢な頂芽の原器が各切片に分れ一斉に発芽するので揃いがよい。消毒は水銀製剤（ウスブロン、マイクロジン）の700~800倍液に20~25分浸漬し蔭干する。同一液で3回までは使えるが、それ以後は薬を追加しなければならない。

3. 催芽

休眠打破の目的で行なわれる、秋作では腐敗し易いが、春作では増収効果が著しいので集約な栽培では実行するがよい。

1) 冷床または温床に催芽：切ったものを並べ、薯のかくれる程度に覆土して十分灌れする。その上にヒニールをかけ2~3週間後に定植する。

2) 浴光催芽：温度20°C内外の室内または温床で20~30日間日光にあて、2~1cmの強壯な芽を出させる。水分を補給する必要はない。処理中は光がまんべんなく当てるために時々薯を反転する。

3) エチクロリン催芽：秋薯を早植えする時に行なう。植付け前、切断した種薯をエチクロリン

の1～3%液に30分浸漬し、冷床または温床で前と同様に15～20日間催芽する。

4. 植付

ナス、トマト、タバコなどナス科植物の跡地には栽培はできるだけさげ、前もって整地し風化させた畑地に植付2週間前から準備する。60cm間隔に鍬巾で深さ20cm位の溝を掘り元肥を入れてよく切り混ぜて、先に盛り上げた土を埋戻し、普通の畑では平坦になるようにし、乾燥地では植溝が幾分低くなるようにし、湿気の多い所では幾分高くなるようにする。元肥として10a当たり堆肥2500kg、硫酸40kg、過石75kg、塩加35kg施す。早植、高温乾燥期には堆肥はマルチングとして種薯の上部に施すか、あるいは切ワラで被覆して地温の上昇を防ぐ。

切った薯は切口を下向にして伏込み5～6cmに覆上する。高温時の植付は腐敗することがあるので、午前10時までと夕方に行なう。

5. 肥培管理

生育の極めて早い作物で、茎葉をなるべく早く繁茂させ、その力で薯の肥大をはかるのであるから肥料は殆んど基肥に与え、追肥を行なうにしても遅れては意味がない。第1回追肥は発芽揃い後5～10cmに伸びた時、第2回は1回後20～25日目に施す。馬鈴薯配合肥料を用いる場合には元肥に3袋、追肥には各1袋、そ菜配合肥料の場合には元肥に4袋、追肥に各1袋ずつ施す。

老薯を植付けて芽が沢山できると、小薯が沢山できて大薯ができないから大薯を生産するためには地上に萌芽すると直ちに芽掻きを行ない1本にする。多少小薯が増加しても多収を期待する場合には2本立ちとする。

土寄は薯の発育に適当な軟い土壌を与え、養分を供給し、生育を早め、茎の動揺を防ぎ、また茎葉に病気が発生した時に薯に伝染するのを防ぐのが大きな目的で1回追肥、2回追肥と同時に行ない10～12cmを標準とする。

6. 病虫害防除

琉球で最も被害の多いのは疫病である。高温多湿の気温が続くときに発生が多く、最初葉に茶褐色の斑点ができ、次第に増大して茎におよび、ひどくなると葉全部枯れて薯にまでおよぶことがあ

る。フジボルドウ、ダイセン等を4～5回散布する。その他に黒瘤病、夏疫病、青枯病等がある。

害虫はアブラムシ、テントウムシダマシなどでBHC、DDT、ダイアジンなどで防除する。

7. 収穫

植付後100日内外で収穫期になる。その時期は葉の色があせて黄変する。4～5日晴天が続いた後行くと傷口より腐敗することもなく、外観を損ずることもない。雨天または降雨後に収穫したものは腐敗し易く、貯蔵に適しない。

収穫した薯は日光に当てると薯の表皮が青くなり商品価値を落とすので、直接日光にさらさないようにする。

8. 採種

ウイルスと休眠性が問題になる。ウイルスをなくすため、高冷地か、常に風の多い海岩地方のようにアブラムシの活動の少ない所で行なわれる。アブラムシやウイルスの寄生植物から離れているように留意され、その距離は普通300mである。

(友寄 長重)